

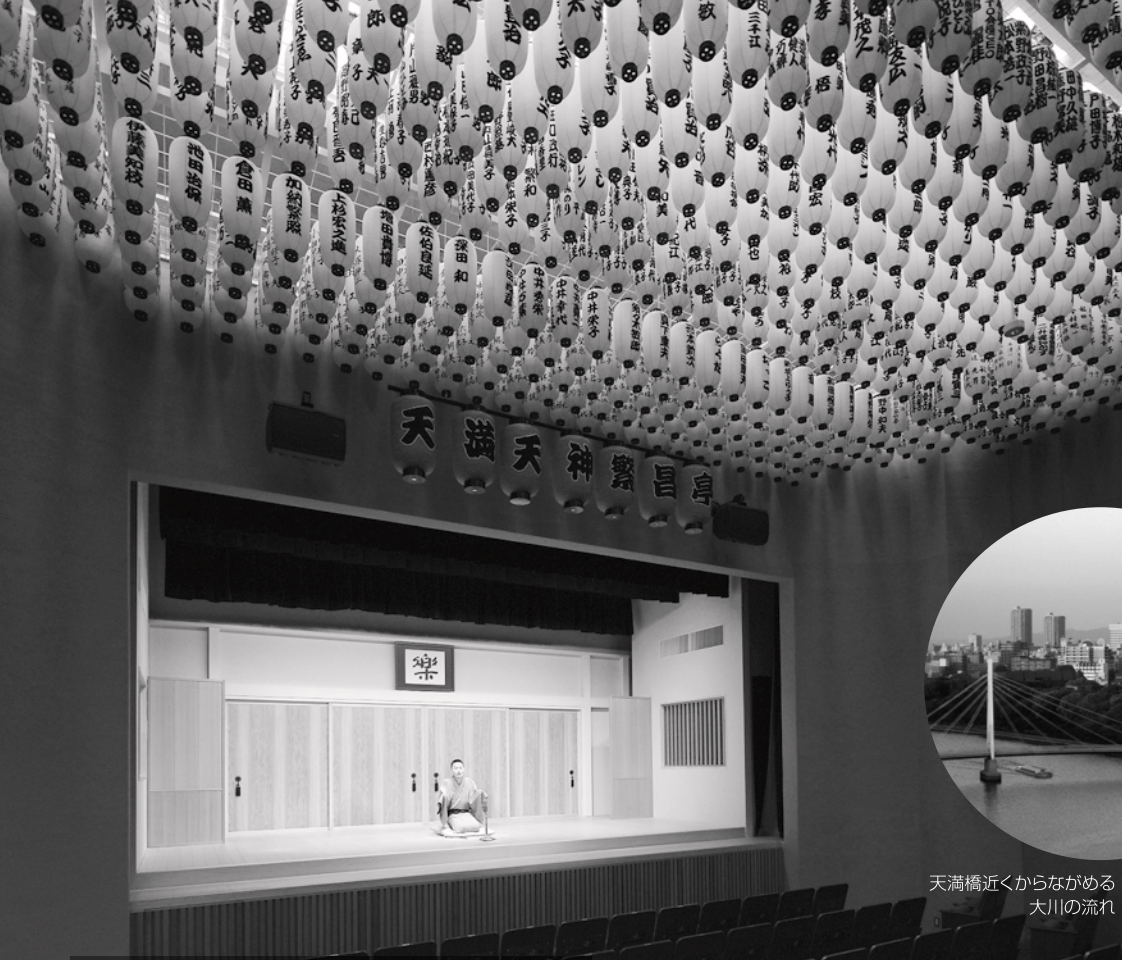
～上方古典芸能と文化を巡る～

落語・  
時間を  
訪ねる旅

第四回

# 幽玄の美と水の都 「船弁慶」ほか (能・狂言)

ナビゲーター  
落語家  
林家竹丸



天満橋近くからながめる  
大川の流れ



林家 竹丸 (はやしや・たけまる)

落語家。本名は前田仁。兵庫県宝塚市出身。95年に四代目林家染丸のもとへ入門。天満天神繁昌亭などを拠点に、落語会に多数出演。講演、コラム執筆など幅広く活躍している。入門までの約6年間、NHK記者として徳島・大阪でニュース取材を担当した異色の経歴を持つ。06年に第43回なにが芸術祭(産経新聞社主催)新人奨励賞を受賞。

一年間続いたこの連載も今号で最後です。最終回に取り上げますが、古典芸能の中でも最も長い伝統を持つ「能・狂言」です。室町時代に観阿弥と世阿弥の親子によって大成したことで知られる「能」、そして、能と同様に猿楽から生まれた笑劇の「狂言」。落語とはまったく異質に見えますが、やはり接点があるんです。それを探しに大阪の街へ繰り出してみました。

「天満天神繁昌亭」の高座で一席。天井には、繁昌亭建設のために浄財を寄せた方々の名が入った提灯が並ぶ

## 天満天神繁昌亭

戦前、この付近が寄席や芝居小屋などの興業街だったことにちなんで、2006年9月15日、大阪天満宮に隣接してオープンした落語専門の演芸場。年中ほぼ無休で、昼席と夜席があるが常に人気を博している



繁昌亭の前には、開場前から大勢のお客さんが訪れる。中には姿を見かけて「竹丸やろ!」と声をかける常連さんも

今日の出発点は、上方の落語家の本拠地「天満天神繁昌亭」。戦後初の落語専門演芸場としてオープンして2年半。いまま大勢のお客さんが来てくださって、ほんまにありがたいことです。さて、能の演目では、「安宅」が歌舞伎「勧進帳」に、「道成寺」が文楽や歌舞伎に取り込まれるなど、他の芸能に影響を与えています。落語の「船弁慶」も、やはり能のパロディ。

その落語の舞台、難波橋に向かいます。途中、芸事にも縁が深い大阪天満宮に参拝し、天神橋から難波橋へ。大川を行き交う船を見ながら、昔の盛況ぶりを想像してみました。能や狂言を嗜んだ大店の旦那衆も、この界限を行走してきたことでしょう。

谷町四丁目近くのビジネス街に、静かにたたずむのが山本能楽堂。案内されて中に入るとびっくり！外観からは想像できない大空間があつて、立派な能舞台が設けられていました。

当主の山本章弘さんは、「1927年に祖父が最初の能楽堂を造ったのですが、戦災で焼失し、1950年に再建したものだ」と説明してくれました。能の魅力を伝えるには実演を観てもらうのが一番。そこで、ここでは初心者向けの公演を数多く行っているほか、落語、講談、浪曲、上方舞など他分野の芸との競演も積極的に企画しているそうです。

## 難波橋

難波橋の辺りは、江戸時代から夕涼みの場所として親しまれていたところ。当時の難波橋（浪花橋）は現在よりも西側にあったが、暑い季節の夕暮れ時には、橋のたもとに茶店や屋台が並び、川面には屋形船が行き来したという

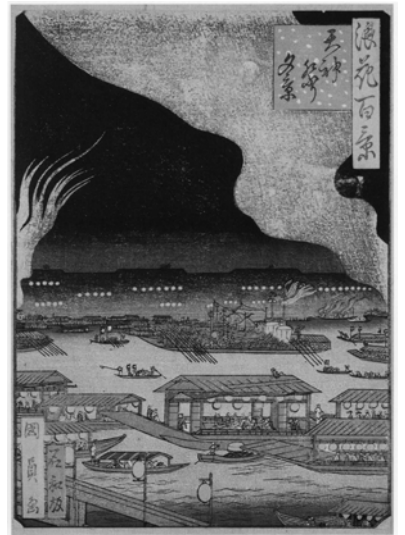


難波橋から見る大阪の風景は、まさに「水都」という雰囲気



ライオン橋として知られる今の難波橋。1912年(明治45)に市電堺筋線を北浜から延伸する際に現在の位置に移された

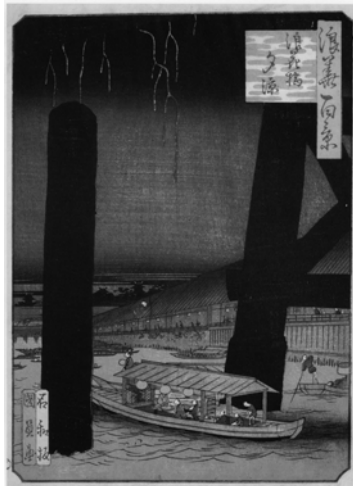
大阪の夏を彩る大阪天満宮の天神祭は、昔から水の都ならではの一大イベント。現在でも100隻以上が参加し、落語船、文楽船、歌舞伎船、能船など、大阪が誇る伝統文化も祭りの場に集結する



浪花百景「天神祭り夕景」  
(国員画、安政年間、大阪城天守閣蔵)



落語にも出てくる「ぼてふり」に扮して、天神橋筋商店街で商売をする人。「ぼてふり」は「棒手売」「棒天振」と書き、天秤棒を担いで売買する商人のこと



浪花百景「浪橋夕涼」  
(国員画、安政年間、大阪城天守閣蔵)

### 能と落語の「船弁慶」

能の「船弁慶」では、義経は兄頼朝の疑いを解こうと都を去り、摂津大物浦へ落ちる。このとき、弁慶は静御前の同行を知って義経を諷め、静は別れを悲しみながら舞い、都へ帰る。〈中入〉一行が船出をすると風がにわか荒れ出し、波間に平知盛など平家の怨霊たちが現れる。義経一行を海に沈めようと襲い掛かってくるが、弁慶が五大明王に祈ると怨霊は遠ざかり、波間に消えていく。

落語では、噺の最後で夫婦喧嘩が「船弁慶」の趣向に変わる。始まりは、長屋の男たちが、大枚をはたいて大川で船遊びをしようとしたこと。その中の一人、喜六は嫁のお松に怒られるのが怖くて口実を作って出かける。ところがお松も知らずに橋の上に夕涼みに来て、喜六が船遊びをしているのを目撃。船へ近づき怒鳴り込み、川へ突き落とされ大騒ぎになる。



繁昌亭近くの天神橋二丁目商店街のアーケード入り口には、天神祭の船に飾るお迎え人形をモチーフにした人形が飾られている。能や歌舞伎・文楽の登場人物が題材で、左上から時計回りに、羽柴秀吉、佐々木高綱、木津勘助、八幡太郎義家





「能舞台の上で、若い女性の面と能衣装を着させてもらいました。ひよっとしたら落語家では初めて？」(竹丸)



「能を観ると『眠くなる』と言う人がいますが、別に、それでもかまわないんです。能は幽玄を演じるもので、心地よい世界への入り口。堅苦しく考えず、肩の力を抜いて楽に観賞してもらっている証拠だと思っています」

能と狂言は同じ舞台上で演じられます。山本さんによると、「能は舞踊と音楽が中心で、『謡』という声楽と『囃子』という楽器演奏に乗せて、舞踊的な動きで物語を進める、いわば日本版のミュージカルやオペラ。一番の特徴は、『面』をつけること。『シテ方』と呼ばれる能の主役を演じる役者と、シテ方を補助する役者が能面をつけます。

狂言は、猿楽が持っていた物まねや道化的な要素を発展させたもの。一部の例外を除いて面は使わず、社会を風刺するエンターテインメントとしての滑稽劇という特徴には、落語と同じ諧謔精神、遊びゴコロを感じます。

最後に特別大サービスで、舞台上で面と衣装を着けさせていただきました。



## 山本能楽堂

大阪で一番古い能楽堂。ここで多彩な公演や教室などが行われる。1950年から続く年6回の「たにまち能」、初心者のための解説付き公演や体験講座、こどものための能教室のほか、落語家の解説により4つの上り伝統芸能が楽しめる「上方伝統芸能ナイト」など、能を広めるために独自の活動を積極的に行っている。



能の魅力語る山本章弘さんは、600年以上の歴史を誇る観世流宗家直門の観世流能楽師準職分



間近に拝見する能面からは、何やら神秘的な雰囲気がただよう。「無表情の人を『能面のような』と言いますが、実はまったく逆で、面の角度を変えながら動作を加えると、豊かな表情が生まれるんです」と山本さん

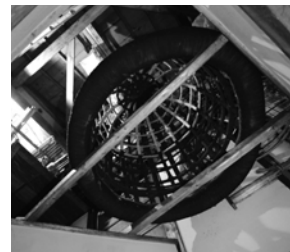


大阪を舞台にした謡曲は、「船弁慶」のほか、「蘆刈」や「江口」「長柄」など、水辺を舞台にしたものが多い。



能・狂言が演じられる能舞台は、約6m四方で三方吹き抜けの本舞台と、下手(舞台に向かって左)にのびる「橋掛り」の2つの空間からできており、どちらにも屋根が付いている。本舞台の背景には必ず松の絵が描かれる

足を踏みならす音が響くように、舞台の下には、大きな瓶がいくつも設置されている



能「道成寺」で使用される大鐘などの大道具は、解体して舞台裏に収められている

芸能の面白さを少しでもお伝えできれば、案内人として最高の喜び。さあ皆さん、舞台見物へ出かけましょう！(談)

この連載であちこち訪ね歩いたのは、かつて私が落語を通じて文楽、歌舞伎、能・狂言へと興味を広げていった過程を再びたどる旅でもありました。互いに影響を与えあっている古典

能の面白さを少しでもお伝えできれば、案内人として最高の喜び。さあ皆さん、舞台見物へ出かけましょう！(談)

能を観て思うのは、文楽、歌舞伎と比べても、舞台から出る情報量が少ないこと。予備知識がないと、登場人物が誰で、筋がどうなのかかわかりにくい。けれど、今日まであまり形を変えずに600年も伝わってきたことには畏敬の念を感じずにはいられません。

難解な分、観客が自由に想像力を働かせて楽しむ幅もまた広い。世阿弥が言うのが「秘すれば花なり、秘せずは花なるべからず」。何でもかんでも映像で見せ、字幕を付けて説明するテレビ番組などは、能は対極の存在。締めくくりに、能をこよなく愛した太閤秀吉を偲んで大阪城天守閣へ。「天下人」になったつもりで最上階に上がると、まさに「絶景かな〜」。あ、これは秀吉に処刑された石川五右衛門のセリフでした(歌舞伎「楼門五三桐」)。



# 大阪城

大阪城天守閣に再現されている、太閤秀吉の黄金の茶室。こちらは絢爛豪華



大阪城天守閣から北の方を見る。今はビル街に隠れて見えにくくなっているが、かつては、大坂と京を結ぶ水運が賑わう様を眼下に見ることができただろう



天守閣の一階には太閤さんの大きな肖像画が飾られている。安田靉彦作の「伏見茶亭」の複製。鮮やかな柄の着物の上に羽織をおった秀吉が持つのは紅梅の小枝



一般の方を対象に、山本章弘さんらが協力して、中央区役所のロビーで実施された「能楽へのいざない」(主催：中央区役所、2月10日)。この日は、能楽への入門編として、謡の体験、囃子の解説と演奏の後、能「狸々」の実演が行われた(写真 シテ・山本章弘)

## 「落語と能と太閤さん」…………… 竹丸

室町時代に京都で発展した能楽ですが、戦国時代に存亡の危機に見舞われました。その再興に大きく寄与したのが太閤秀吉だったそうです。能役者たちを経済的に援助し、自らも能を演じ、また自分が主人公の演目もつくらせました。こうして能楽は武士の間に広がっていきます。江戸時代以降は大坂の町人たちも、嗜みとして謡曲を稽古したそうで、落語に「船弁慶」がパロディ化して組み入れられたのも、その内容が広く知られていたからでしょう。



天守閣入り口横には、その昔、時報として使われた大砲が置かれている。思わず「撃て〜!」の一言が

